

# 藤十郎の恋

菊池寛

青空文庫



元禄げんろくと云う年号が、何時いつの間にか十余りを重ねたある年の二月の末である。

都では、春の匂においが凡すべての物を包んでいた。ついこの間までは、頂上の処だけは、斑まだらに残っていた叡えいざん山の雪が、春の柔い光の下に解けてしまつて、跡には薄紫を帯びた黄色の山肌やまはだが、くつきりと大空に浮んでいる。その空の色までが、冬の間腐つたような灰色を、洗い流して日一日緑さに冴さえて行つた。

鴨かもの河原には、丸葉柳まるはやなぎが芽ぐんでいた。その礫こいしの間には、自

然咲の董すみれや、蓮華れんげが各自の小さい春を領していた。河水は、日増ひましに水量を加えて、軽い藍色あいいろの水が、処々の川瀬にせかれて、淙そ々うそうの響を揚げた。

黒木を売る大原女おはらめの暢のびやかな声までが春らしい心を唆そそつた。

江戸へ下る西国大名の行列が、毎日のように都の街々を過ぎた。

彼等は三条の旅宿に二三日の逗とまり留りゆうをして、都の春を十分に楽しむと、また大鳥毛おおとりげの槍やりを物々しげに振立てて、三条大橋の橋板を、踏み轟とどろかしながら、遙はるかな東路あずまじへと下るのであった。

東国から、九州四国から、また越路こしじの端からも、本山参りの善ぜん男なん善ぜん女の群ぐんが、そろそろと都をさして続いた。そして彼等も

春の都の渦巻の中に、幾日かを過すのであった。

その裡うちに、花が咲いたと云う消息が、都の人々の心を騒がし始めた。祇園清水東山ぎおんきよみずひがしやま 山やま 一帯の花が先まず開く、嵯峨さかや北山きたやまの花がこれに続く。こうして都の春は、愈々いよいよ爛らん熟じゆくの色を為なすのであつた。

が、その年の都の人達の心を、一番はげ烈しく狂わせていたのは、四条中島都万太夫座みやこまんだゆうざの坂田藤十郎と山下半左衛門座の中村七三郎との、去年から持越しの競争であつた。

三ヶ津の総芸頭そうげいがしらとまで、讃たたえられた坂田藤十郎は傾城買けいせいかいの上手じょうずとして、やつしの名人としては天下無敵の名を擅ほしいにまましていた。が、去年霜月、半左衛門の顔見世狂言かおみせに、東から上つた少し長ようちやう中村七三郎は、江戸歌舞伎の統領として、藤十郎と同じく

やつしの名人であつた。二人は同じやつしの名人として、江戸と京との歌舞伎の為にも、烈しく相争わねばならぬ宿縁を、持つていたのであつた。

京の歌舞伎の役者達は、中村七三郎の都上りを聴いて、皆異常な緊張を示した。が、その人達の期待や恐怖を裏切つて七三郎の顔見世狂言は、意外な不評であつた。見物は口々に、

「江戸の名人じゃ、と云う程に、何ぞ珍らしい芸でもするのかと思つていたに、都の藤十郎には及び付かぬ腕じゃ」と罵ののしつた。七三郎を譏そする者は、ただ素しろうと人の見物だけではなかつた。彼の舞台を見た役者達までも、

「江戸の少長は、評判倒れの御仁じゃ、尤もっとも江戸と京とでは評判

の目安も違ふほどに江戸の名人は、京の上手にも及ばぬものじや。  
しよせんものまね所詮物真似狂言は都のものと極わまつた」と、勝誇るように云  
 い振れた。が、七三郎を譏する噂うわさが、藤十郎の耳に入ると、彼は  
まゆひそ眉を顰めながら、

「われらの見るところは、また別じや。少長どのは、まことに至  
 芸おそのお人じや。われらには、怖ろしい大敵じや」と、只一人世評  
しりぞを斥けたのであつた。

## 二

果して藤十郎の評価は、狂っていないなかつた。顔見世狂言にひど

い不評を招いた中村七三郎は、年が改まると初春の狂言に、『傾いせい城あさま浅間ケ嶽だけ』を出して、巴之丞ともものじようの役に扮ふんした。七三郎の巴之丞の評判は、すさまじいばかりであつた。

藤十郎は、得意の夕霧伊左衛門ゆうぎりを出して、これに対抗した。

二人の名優が、舞台の上の競争は、都の人々の心を湧わき立たせるに十分であつた。が新しき物を追うのは、人心こちきの常である。□  
性がなき京童きようわらべは、

「藤十郎どのの伊左衛門いさえもんは、いかにも見事みやうじゃ、が、われらは幾度見たか数えられぬ程じゃ。去年の弥生やよい狂言も慥たしか伊左衛門じゃ。もう伊左衛門には堪能いたしておるわ。それに比ぶれば、七三郎どのの巴之丞は、都にて初ての狂言じゃ。京の濡事師ぬれごとしとはまた



違うて、やさしい裡うちにも、東男あずまおとこのきついいところがあるのが、  
 てんと堪たまらぬところじゃ」と口々に云い囃はやした。

動き易やすい都の人心は、十年讚さんたん嘆し続けた藤十郎の王座から、  
 ともすれば離れ始めそうな氣勢けはいを示した。万太夫座の木戸よりも、  
 半左衛門座の木戸の方へと、より沢山の群衆が、流れ始めていた。

春狂言の期日が尽きると、万太夫座は直すぐ千秋楽になつたにも  
 拘かかわらず、半左衛門座は尚なお打ち続けた。二月に入つても、客足は少  
 しも落ちなかつた。二月が終りになつて、愈々いよいよ弥生狂言の季節  
 が、近づいて来たのにも拘かわらず、七三郎は尚巴之丞の役に扮し  
 て、都大路の人気を一杯に背負うていた。

「半左衛門座では、弥生狂言も『傾城浅間ヶ嶽』を打ち通すそう

じやが、かような例は、玉村千之丞河内通いの狂言に、百五十日打ち続けて以来、絶えて聞かぬ事じや。七三郎どのの人氣は、前代未聞みもんじや」と、巷ちまたの風説うわさは、ただこの沙汰さたばかりのようであつた。

こうした噂うわさが、かまびすしくなるにつれ、私ひそかに腕こまねを拱こまねいて考え始めたのは、坂田藤十郎であつた。

三ヶ津総芸頭と云う美称を、長い間享受して来た藤十郎は、自分の芸ついでに就ついでては、何等の不安もないと共に、十分な自信を持つていた。過ぐる未ひつじどし年さいぎゆうに才さいぎゆう牛市川団十郎が、日本随市川のかまびすしい名声を担にのうて、東あずまからはるばると、都みやこの早雲長吉はやぐもちようきち座ざに上あつて来た時も、藤十郎の自信はビクともしなかつた。

『お江戸団十郎見しやいな』と、江戸の人々が誇るこの珍客を見るために、都の人々が雪崩なだれを為なして、長吉座に押し寄せて行つた時も、藤十郎は少しも騒がなかつた。殊ことに、彼が初めて団十郎の舞台を見た時に、彼は心の中で窃ひそかに江戸の歌舞伎を軽蔑けいべつした。彼は、団十郎が一流編み出したと云う荒事を見て、何と云う粗野な興きざめた芸げだろうと思つて、彼の腹心の弟子の山下京右衛門が、「太夫様たゆう、団十郎の芸をいかが思おぼしめ召めさる、江戸自慢の荒事とやらをどう思召しめさる」と訊きいた時、彼は慎つまじやかな苦笑もらを洩もしながら「実じつ事ごとの奥義の解せぬ人達のする事じや。また実事の面白さの解せぬ人達の見る芝居じや」と、一言の下に貶けなし去つた。が今度の七三郎に対しては、才牛をあしろつたようには行かなかつ

た。

三

と、云つて藤十郎は、妄むげに七三郎を恐れているのではない。もとより、団十郎の幼稚な児ちこだま騙うづしにも似た荒事とは違つて、人間の眞実な動作しうちをさながらに、模うづしている七三郎の芸を十分に尊敬もすれば、恐れもした。が、藤十郎は芸能と云う点からだけでは、自分が七三郎に微塵みじんも劣らないばかりでなく、寧ろむし右際勝りみぎわまさであることを十分に信じた。従つて、今まで足り満ちていた藤十郎の心に不安な空虚と不快な動揺とを植え付けたのは、七三郎との

對抗などと云う事よりも、もつと深いもつと本質的なある物であった。

彼は、二十の年から四十幾つと云う今まで、何の不安もなしに、濡事師ぬれごとしに扮ふんして来た。そして、藤十郎の傾城買けいせいかいと云えば、竜骨車りゅうこしゃにたよる里の童にさえも、聞えている。また京の三座見物達も藤十郎の傾城買の狂言と言え、何時もながら惜し気もない喝采かつさいを送っていた。彼が、伊左衛門の紙衣姿かみこすがたになりさえすれば、見物はたわいもなく喝采した。少しでも客足が薄くなると、彼は定まって、伊左衛門に扮した。しかも、彼の伊左衛門役は、トラムプの切札か何かのように、多くの見物と喝采とを、藤十郎に保証するのであった。

が、彼は心の裡うちで、何時いつとなしに、自分の芸に対する不安を感じていた。いつも、同じような役に扮して、舌たるい傾城を相手の台詞せりふを云うことが、彼の心の中に、ぼんやりとした不快を起すことが度たび重なるようになっていた。が、彼は未まだいいだろう、未だいいだろうと思ひながら一日延ばしのように、自分の仕馴しなれた喝采うを獲とるに極きまった狂言から、脱け出そうと云う気を起さなかつたのである。

こうした藤十郎の心に、怖おそろしい警鐘は到頭伝えられたのだ。「また何時もながら伊左衛門か、藤十郎どこの紙衣姿は、もう幾度見たか、数えきれぬ程じゃ」と、云う巷ちまたの評判は、藤十郎に取つては致命的な言葉であつた。彼が、怖れたのは七三郎と云う敵

ではなかった。彼の大敵は、彼自身の芸が行き詰まっていることである。今までは、比較される物のない為に、彼の芸が行き詰まっている事が、無智な見物には分らなかつたのである。彼は、七三郎の巴之丞を見た時に、傾城買の世界とは、丸きり違つた新しい世界が、舞台の上に、浮き出されている事を感じない訳には、行かなかつた。ただ浮ついた根も葉もないような傾城買の狂言とは違つて、一步深く人の心の裡に踏み入つた世界が、舞台の上には展開されて来るのを認めない訳には行かなかつた。見物は、傾城買の狂言から、たわいもなく七三郎の舞台へ、惹き付けられて行つた。が、藤十郎は、見物のたわいもない妄動もうどうの裡に、深い尤もつともな理由のあるのを、看取しない訳には行かなかつたのである。

小手先の芸の問題ではなかつた。彼は、もつと深い大切なところで、若輩の七三郎に一足取残されようとしたのである。七三郎の巴之丞が、らくちゆう洛中そそ洛外の人気を唆つて、弥生狂言をも、同じだしもの芸題で打ち続けると云う噂を聞きながら、藤十郎は烈しい焦しゆう躁そうと不安の胸を抑えて、じつと思案の手を拱こまぬいたのである。その時に、ふと彼の心に浮んだのは、浪華なにわに住んでいる近松門左衛門の事であつた。

## 四

それは、二月のある宵であつた。四条中ちゆうとう東の京の端、鴨かもが



川の流近く瀬鳴せなりの音が、手に取って聞えるような茶屋宗清むねせいの

大広間で、万太夫座の弥生狂言の顔つなぎの宴が開かれていた。

広間の中央、床柱を背にして、銀燭ぎんしょくの光を真向に浴びなが

ら、どんすの鏡蒲団かがみぶとんの上に、悠ゆつたりと坐り、心持脇きようそく息に

身を靠もたせているのは、坂田藤十郎であった。茶せんに結った色白

の面は、四十を越した男とは、思われぬ程の美しさに輝いて見え

た。下には鼠縮緬ねずみちりめんの引かえしを着、上には黒羽二重はぶたえの両面ふたつめ

芥子人形の加賀紋かがもんの羽織を打ちかけ、宗伝そうでん唐茶からちやの畳帯を

しめていた。藤十郎の右に坐っているのは、一座の若女形わかおやまの切

波千寿りなみせんじゆであった。白小袖しろこそでの上に、紫縮緬の二つ重ねを着、

虎膚天鷲絨とらふびろうどの羽織に、紫の野良帽子やろうぼうをいただいた風情ふぜいは、さなが

ら女の如く艶めかしい、この二人を囲んで、一座の道化方、くわしや方、若衆方などの人々が、それぞれ華美な風俗の限を尽して居並んでいた。その中に、只一人千筋の羽織を着た質素な風俗をした二十五六の男は、万太夫座の若太夫であつた。彼は、先刻から酒席の間を、彼方此方と廻つて、酒宴の興を取持つていたが、ようやめいてい漸く酌あつちこつちしたらしい顔に満面の微笑を湛えながら、藤十郎の前に改めて畏まると、恐る恐る酒盃さかずきを前に出した。

「さあ、もう一つお受け下されませ。今度の弥生狂言は、近松様の趣向で、歌舞伎始まつての珍らしい狂言じやと、都の中はただこの噂ばかりじゃげにござります。傾城買の所作しよきは日本無双と云われた御身おみさま様じやが、道ならぬ恋のいきかたは、又格別の御思案

がござりましたようなハハハハ」と、巧な追ついで従したが笑いに語尾を濁した。と、藤十郎と居並んでいる切波千寿は、急に美しい微笑を洩もらしながら、

「ホンに若太夫殿の云う通じや。藤十郎様には、その辺の御思案が、もうちゃんあやつと付いている筈はずじや。われなどは、ただ藤十郎様に操あやつられて傀儡くぐつのように動けばよいのじや」と、合あ槌いづちを打った。

藤十郎は、若太夫の差した酒盃を、受け取りはしたものの、彼の言葉にも、千寿の言葉にも、一言も返しをしなかつた。彼は、酒の味が、急に苦くなつたように、心持顔をしか顰しかめながら、グツト一気にその酒盃を飲み乾ほしたばかりであつた。

彼は、今宵こよひの酒宴が、始まつて以来、何気ない風に酒盃を重ね

てはいたものの、心の裡うちには、可なり烈しい芸術的な苦悶くもんが、渦巻うずまいているのであつた。

彼が、近松門左衛門に、急飛脚を飛ばして、割なく頼んだことは、即座に叶かなえられたのであつた。今までの傾城買とは、裏と表のように、打ち変つた狂言として、門左衛門が藤十郎に書与えた狂言は、浮ついた陽気なたわいもない傾城買の濡事とは違つて、命を賭としての色事であつた。打ち沈んだ陰気な、懸命な命を捨ててする濡事であつた。芸題は『大経師だいきようじ 昔むかし 暦ごよみ』と云つて、京の人々の、記憶にはまだ新しい室町通の大経師の女房おさんが、手代茂右衛門てだいもえもんと不義をして、粟田口あわたぐちに刑死するまでの、呪のろわれた命懸けの恋の狂言であつた。

藤十郎の芸に取つて、其<sup>そこ</sup>処に新しい世界が開かれた。がそれと同時に、前代未聞<sup>みもん</sup>の狂言に対する不安と焦慮とは、自信の強い彼の心にも萌<sup>きざ</sup>さない訳には行かなかつた。

## 五

藤十郎の心に、そうした屈託<sup>くつたく</sup>があろうとは、夢にも気付かない若太夫は、芝居国の国王たる藤十郎の機嫌<sup>きげん</sup>を、如何<sup>いか</sup>にもして取結ぼうと思つたらしく、

「この狂言に比べましては、七三郎殿の『浅間ヶ嶽』の狂言も童<sup>わらわ</sup>たらしのように、曲ものう見えまするわ。前代未聞の密<sup>みそ</sup>夫<sup>かお</sup>の狂

言とは、さすがに門左衛門様の御趣向じや。それに付けましても、坂田様にはこうした変つた恋のお覚えもござりましようなハハハハ」と、時にとつての座興のように高々と笑つた。

今まで、おし黙つていた藤十郎の堅い唇が、くちびる綻びたかと思つと、

「左様な事、何のあつてよいものか」と、苦りきつて吐き出すように云つた。「藤十郎は、生れながらの色好みじやが、まだ人の女房と念ねんごろ頃した覚えはござらぬわ」と、冷めたい苦笑を洩もらしながら付け加えた。若太夫は、座興の積つもりで云つた諧たわむれ諺ことわざを、真向まっこうから突き飛ばされて、興きようざめ顔に黙つてしまった。

傍たもとに坐つていた切波千寿は、一座が白けるのを恐れたのである。取とり做なし顔に、微笑を含みながら、

「ほんに、坂田様の云われる通じや。この千寿とても、主ある女房と、念ごろした事はないわいな」と、云いながら女のように美しい口を掩おおうた。

が、藤十郎は、前よりも一際ひとときわ、苦りきつたままであった。彼は今心の裡で、僅わずか三日の後に迫った初日を控えて、芸の苦心に肝胆を砕いていたのである。彼に取つて、其処そこに可なり危険な試金石が横よこわつてゐる。『あれ見よ、密夫の狂言とは、名ばかりで相も変らぬ藤十郎じゃ』と、云われては、自分の芸は永久に廃すたれるのだと、彼は心の裡に、覚悟の臍ほぞを堅めていた。ただ、相手の傾城が、人妻に変わったばかりで、昔ながらの藤十郎だとは、夢にも云わせてはならないと、心の裡に思い定めていた。

が、それかと云つて、藤十郎は、自分で口に出して云つた通、道ならぬ恋をした覚はさらさらなかつたのである。元より、歌舞伎役者の常として、色子いろことして舞台を踏んだ十二三の頃から、数多くの色々の色情生活をけみ閱している。四十を越えた今日までには幾十人の女を知つたか分らない。彼の姿絵を、床の下に敷きながら、焦れ死んだ娘や、彼に対する恋の叶かなわぬ悲しみから、清きよ水みづの舞台から身を投げた女さえない事はない。が、こうした生活にも拘かわらず、天性律義りちぎな藤十郎は、若い時から、不義非道な色事には、一指をだに染めることをしなかつた。そうした誘惑に接する毎ごとに、彼は猛然として、これと戦つて来ている。彼が、役者にも似合わず『藤十郎殿は、物堅い御仁じゃ』と、云われて、芝居国



の長者として、周囲から、尊敬されているのも、一つにはこうした訳からでもあった。

従つて、彼は、過去の経験から、人妻を盗むような必死な、空恐ろしい、それと同時に身を焼くように烈はげしい恋に近い場合を、色々と尋ねてみたが、彼のどの恋もどの恋も極めて正当な、物柔かな恋であつて、冬の海のように恐ろしい恋や、夏の太陽のような烈しい恋の場合は、どう考えても頭に浮んでは来なかつた。

## 六

傾城けいせい買かいの経緯いきさつなれば、どんなに微妙にでも、演じ得ると云

う自信を持った藤十郎も、人妻との呪のろわれた悪魔的な、道ならぬ然しかし懸命な必死の恋を、舞台の上はどう演し活かしてよいかは、ほとほと思案の及ばぬところであつた。これまでの歌舞伎狂言と云えば、傾城買のたわいもない戯れか、でなければ物真ものまね似の道化に尽きていた為に、こうした密みそかお夫の狂言などに、頼たのまれるような前代の名優の仕残した型などは、微塵みじんも残っていないなかつた。それかと云つて、彼はこうした場合に、打ち明けて智慧ちえを借るべき、相談相手を持つていかなかった。彼の茂右衛門に、おさんを勤める切波千寿は、天性の美貌びぼう一つが、彼の舞台の凡すべてであつた。ただ、藤十郎の指図のままに、傀儡のごとく動くのが、彼の演えんぎ伎の凡てであつたのだ。

藤十郎は、自分自身の肝脳あたまを搾しぼるより外には、工夫の仕方もなかつたのである。

藤十郎の不機嫌の背後に、そうした根本的な屈託が、潜んでいるとは気のつかない一座の人々は、白け始めようとする酒宴の座を、どうかして引き立たせようと、思ったのだろう、五十に手の届きそうな道化方の老優は、傍そばに坐つていた二十を出たばかりの、野良帽子やろうぼうを着た美しい若衆方を促し立てながら、おどけた連舞つれまいを舞い始めた。

藤十郎は、二人の舞を振向きもしないで、日頃には似ず、大杯を重ねて四度ばかり、したたかに飲み乾すと、俄にわかに発して来た酔よに、座には得堪えたえられぬように、つと席を立ちながら、河原に臨

んだ広い縁に出た。

河原の闇やみの底を流れる川水が、ほのかな光を放っている外は、  
晦日みそかに近い夜の空は曇つて、星一つさえ見えなかつた。声ばかり  
飛び交うているかのように、闇のなかに千鳥が、ちちと鳴きしき  
つていた。

歌舞伎の長者として、王者のように誇を、持っていた藤十郎の  
心も、蹴けあわ合せに負けた鶏とりのように悄しよげ気きつてしまっていた。彼が、  
座を立った為に、上からの圧迫の取れたように、急にはずみかけ  
た酒宴の席のさわがしいどよめきを、後あとにしなから、彼は知らず  
知らず静寂な場所を求めて、勝手を知った宗清の部屋々々を通り  
抜けながら、奥の離座敷を志した。

おもや  
 母屋からは一段と、河原の中に突出ている離座敷には、人の気  
 勢はいもなかつた。ただほんのりと灯ともっている、絹行燈きぬあんどんの光の裡に、  
 美しい調度などが、春の夜に適ふさわしい艶なまめいた静けさを保つていた。  
 藤十郎は、人影の見えぬのを心の中に欣よろこんだ。彼は、床の間に置  
 いてあつた脇きょうそく息を、取り下すと、それに右の脇ひじを靠もたせながら、  
 身を横よこざまに伸したのである。

が、騒々しい酒宴の席から、身を脱のがれた欣よろこびは、直すぐ消えてし  
 まつて、芸の苦心が再びひしひしと胸に迫つて来る。明日からは  
 稽古けいこが始まる。肝腎かんじん要かなめの茂右衛門の行き方が、定きまらいでは相  
 手のおさんも、その他の人々もどう動いてよいか、思案の仕様も  
 ないことになる。己おのが工夫くまが拙ますうては、近松門左が心を碎いた前

代未聞の狂言も、あたら京童の笑い草にならぬとも限らない。こ  
う思いながら、藤十郎は胸の中に渦巻いている、もどかしさを抑  
えながら、一途いちずに心をその方へ振り向けようとあせった。

その時である。母屋の方から、とんとんと離座敷を指して来る  
人の足音が、聞えて来た。

## 七

折角、さわがしい酒席を逃のがれて、求め得た静かな場所で、芸の  
苦心を凝らそうと思つていた藤十郎は、自分の方へ近づいて来る  
人の足音を聞いて、心持眉まゆを顰しかめぬ訳には行かなかつた。

が、近づいて来る足音の主は、此処ここに藤十郎が居ようなどとは、夢にも気付かないらしく、足早に長い廊下を通り抜けて、この部屋に近づくままに、女性らしい衣きぬずれの音をさせたかと思うと、会釈もなく部屋の障子を押し開いた。が、其処そこに横たわっていた藤十郎の姿を見ると、吃びっくり驚して敷居しきいぎわ際に立ち竦すくんでしまった。「あれ、藤様とうようはここにおわしたのか。これはこれはいかい粗相を」と、云いながら、女は直ぐ障子を閉ざして、去ろうとしたが、又立ち直つて、「ほんに、このように冷える処で、そうして御座つて、御風邪かぜなど召すとわるい。どれ、私が夜のものをかけて進ぜましょう」と、云いながら、部屋の片隅かたすみの押入から、夜具を取り下ろそうとしている。

藤十郎は、最初足音を聞いた時、召使の者であろうと思つたので、彼は寝そべつたまま、起き直ろうとはしなかつた。が、それが意外にも、宗清の主人 宗山清兵衛むねやませいべえの女房お梶かじであると知ると、彼は起き上つて、一寸居ちよつとずまいを正しながら、

「いやこれは、いかい御雑作じやのう」と、会釈をした。

お梶は、もう四十に近かつたが、宮川町の歌妓うたいめとして、若い頃に嬌きようめい名なを謳うたわれた面影が、そつくりと白い細面の顔に、ありありと残っている。浅黄あさぎぬめ統ひきの引かえしに折びろうどの帯をしめ、薄色の絹足袋きぬたびをはいた年増姿としまは、又なく艶えんに美しかった。藤十郎は、昔から、お梶を知っている。若衆方の随一の美形と云われた藤十郎が美しいか、歌妓のお梶が美しいかと云う物争いは、



二十年の昔には、四条の茶屋に遊ぶ大尽達の口に上った事さえある。その頃からの馴染である。が、藤十郎は、今までに、お梶の姿を心にとめて、見たこともない。ただ路傍の花に対するような、淡々たる一瞥べつを与えていたに過ぎなかつた。

が、今宵こよいは、この人妻の姿が、云い知れぬ魅力もつを以て、ぐんぐんと彼の眼の中に、迫つて来るのを覚えた。密みそかお夫と云う彼にとつては、未だ踏いまんでみた事のない恋の領域の事を、この四五日、一心に思い詰めていた為だろう。今までは余り彼の念頭になかつた人妻と云う女性の特別な種類が、彼の心に不思議な魅力を持ち始めて、今お梶の姿となつて、ぐんぐん迫つて来るように覚えた。

藤十郎のお梶を見詰める眸ひとみが、異常な興奮で、燃え始めたのは

無論である。人妻であると云う道徳的な柵しがらみが取とり払はられて、その古木かきが却かえつて、彼の慾情つちかを培たぎ、薪木たきぎとして投なげられたようである。彼は、娘や後家や歌妓や遊女などに、相對した時には、かつふついだ懐いだいた事のないような、不思議な物狂まわしい情熱じやうねつが、彼の心と身体とを、沸々燃やし始めたのである。

## 八

藤十郎の心にそうした、物狂まわしい風ひようふうが起おつていようと、夢にも氣付かないらしいお梶かじは押入れから白しろ紬ぬめの夜着よぎを取出すと、藤十郎の背後に廻りながら、ふうわりと着せかけた。

白鳥の胸毛か何かのように、暖い柔かい、夜着の感触を身体一面に味あじわつた時、藤十郎のお梶に対する異常な興奮は、危く爆発しようとした。が、彼の律義りちぎな人格は、咄嗟とっさに彼の慾情もろどうの妄動もうどうをきつぱりと、制し得たのである。藤十郎は、宗山清兵衛の事を考えた。また、貞淑と云う噂うわさの高いお梶の事を考えた。そして自分が、今まで色事をしながらも、正しい道を踏はずみ外はずさなかつたと云う自分自身の誇を考えた。彼のお梶に対して懐いた嵐あらしのような激動たぢまは、忽たちまち和なぎ始めたのである。

お梶は、平素いっそもの通のお梶であつた。彼女は夜着を着せてしまふと「さあ、お休みなされませ。彼方あちらへ行いつたら女どもに、水など運はばせましようわいな」と、愛想笑いを残して足早に部屋を出よ

うとした。その刹那せつなである。藤十郎の心にある悪魔的な思付がムラムラと湧わいて来た。それは恋ではなかった。それは烈はげしい慾情ではなかった。それは、恐ろしいほど冷めたい理性の思付であった。恋の場合には可なり臆おくびよう病であつた藤十郎は、あたかも別人のように、先刻の興奮は、丸きり嘘であつたかのように、冷静に、

「お梶どの、ちと待たせられい」と、呼び止めた。

「何ぞ、外に御用があつてか」と、お梶は無邪気に、振り返つた。剃そり落とした眉毛まゆげの後が青々と浮んで見える色白の美顔は、絹きぬあ行燈いんどんの灯影ほかげを浴びて、ほんのりと艶なまめかしかつた。

「ちと、御意を得たいことがある程に、坐つてたもらぬか」こう

云いながら、藤十郎は、心持ち女の方へ膝ひざをすすませた。

お梶は、藤十郎の息込み方に、少し不安を、感じたのであろう。藤十郎には、余り近寄らないで、其処こゝに置いてある絹行燈の蔭かげに、うづく踞すくまるように坐った。

「改まって何の用ぞいのうおほほほ」と、何気なく笑いながらも、ややおもは稍面映ややおもはゆげに藤十郎の顔を打ち仰いだ。藤十郎の声音こゝねは、今までとは打って変つて、低いけれども、然しかしながら力強い響を持つていた。

「お梶どの。別儀ではござらぬが、この藤十郎は、そなたに二十年来隠していた事がある。それを今宵は是非にも、聴もいて貰もらいたいのじゃ。思い出せば、古いことじゃが、そなたが十六で、われ

らが二十はたちの秋じやつたが、祇園祭ぎおんまつりの折に、河原の掛小屋で二人一緒に、連舞つれまいを舞うたことを、よもや忘れはしやるまいなあ。われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてじや。宮川町のお梶かぢどのと云えば、いかに美しい若女形わかおやまでも、足下にも及ぶまいと、兼々かねがね人の噂うわさに聴いていたが、そなたの美しさがよもあれ程であろうとは、夢にも思い及ばなかつたのじや」と、こう云いながら、藤十郎はその大きい眼を半眼に閉じながら、美しかった青春の夢を、うっとり追うているような眼付をするのであった。

## 九

「その時からじゃ。そなたを、世にも稀まれな美しい人じやと、思い染めたのは」と、藤十郎は、お梶の方へ双膝もろひざを進ませながら、必死の色を眸ひとみに浮べて、こう云いきつた。

藤十郎に呼び止められた時から、ある不安な期待に、胸をとどろかせていたお梶は最初はこの美しい男の口から、自分達の華はなやかな青春の日の、想おもい出いで話わなしを聴かされて、魅せられたように、ほのぼのと二つの頬ほおを薄紅に染めていたが、相手の言葉が、急な転回を示してからは、その顔の色は刹那に蒼あおざめて、蹲すまくまっつている華奢きゃしゃな身体からだは、わなわなと戦おのき始めていた。

藤十郎は、恋をする男とは、どうしても受取れぬ程の、澄んだ冷たい眼付で、顔さえ擡もたげ得ぬ女を刺し透とおす程に、鋭く見詰めて

いながら、声だけには、烈しい熱情に顫ふるえているような響を持たせて、

「そなたを見染めた当座は、折があらば云い寄ろうと、始終念じてはいたものの、若衆方の身は親方の掟おきてが厳しゆうて、寸時も心には委まかせぬ身体じや。ただ心は、焼くように思い焦こがれても、所しよせ詮んは機おりを待つより外はないと、諦あきらめている内に、二十の声を聞

くや聞かずに、そなたは清兵衛殿の思われ人となつてしまわれた。その折のわれらが無念は、今思い出しても、この胸が張り裂くるようでおじやるわ」こう云いながら、藤十郎は座にもえ堪たえぬよ  
うな、巧みな身悶みもたえをして見せたが、そうした恋を語りながらも、彼の二つの眸だけは、相変らず爛らんらん々たる冷たい光を放つて、女



の息づかいから容子<sup>ようす</sup>までを、恐ろしきまでに見詰めている。

お梶の顔の色は、彼女の心の恐ろしい激動をさながらに、映し出していた。一旦蒼ざめきってしまった色が、反動的に段々薄赤くなると共に、その二つの眼には、熱病患者に見るような、直<sup>すぐ</sup>にも火が点<sup>つ</sup>きそうな凄<sup>すさま</sup>じい色を湛<sup>たた</sup>え始めた。

「人妻になつたそなたを恋い慕うのは人間のする事ではないと、心で強<sup>きつ</sup>う制統しても、止まらぬは凡夫の想じや。そなたの噂<sup>うわさ</sup>を聴くにつけ、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたの事を忘れた日は、ただ一日もおじやらぬわ」彼は、一語一語に、一句一句に巧な、今までの彼の舞台上の凡<sup>すべ</sup>ての演戯にも、打ち勝<sup>まさ</sup>つた程の仕打を見せながら、しかも人妻をかき口説く、恐<sup>おそれ</sup>怖と不安とを

交えながら、小鳥のように疎すくんでいる女の方へ、詰め寄せるのであつた。

「が、この藤十郎も、人妻に恋をしかけるような非道な事は、なすまじいと、明暮燃え熾さかる心をじつと抑えて来たのじやが、われらも今年四十五じや、人間の定命じようみょうはもう近い。これ程の恋を——二十年来偲しのびに偲しのんだこれ程の想を、この世で一言も打ち明けいで、何時いつの世誰にか語るべきと、思うに付けても、物狂わしゆうなるまでに、心が擾みだれ申して、かくの有様じや。のう、お梶どの、藤十郎をあわれと思召おほしめさば、たった一言情ある言葉を、なあ……」と、藤十郎は狂うばかりに身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せている。ただ恋に狂うている筈はずの、彼の瞳ひとみばかり

は、刃やいばのように澄みきっていた。

余りの激動に堪たえかねたのであろう、お梶は、

「わっ」と、泣き俯ふしてしまった。

一〇

恐ろしい魔女が、その魅力の犠牲者を、見詰めるように、藤十郎は泣き俯したお梶を、じつと見詰めていた。彼の唇くちびるの辺には、凄すさまじい程の冷たい表情が浮んでいて、が、それにも拘かわらず、声と動作とは、恋に狂うた男に適ふさわしい熱情を、持っている。

「のう、お梶どの。そなたは、この藤十郎の恋を、あわれとは思おぼ

さぬか。二十年来、堪え忍んで来た恋を、あわれとは思さぬか。さても、強いお人じやのう」こう云いながら、藤十郎は、相手の返事を待った。が、女はよよと、すすり泣いているばかりであった。

灯を慕つて来た千鳥だろう。銀の鋏を使うような澄んだ声が、瀬音にも紛れず、手に取るように聞えて来る。女も藤十郎も、おし黙ったまま、暫くは時刻が移った。

「藤十郎の切ない恋を、情なくするとは、さても気強いお人じやのう、舞台上の上の色事では日本無双の藤十郎も、そなたにかかつては、たわいものう振られ申したわ」と藤十郎は、淋しげな苦笑を洩した。

と、今まで泣き俯していた女は、ふと面を上げた。

「藤様、今仰つた事は、皆本心かいな」

女の声は、消え入るようであつた。その唇が微かに痙攣した。何の、てんごうを云うてなるものか、人妻に云い寄るからは、命を投げ出しての恋じゃ」と、いかと思つと、藤十郎の顔も、さつと蒼白そうはくに變じてしまつた。浮腰になつてゐる彼の膝ひざが、かすかに顫ふるいを帯び始めた。

必死の覚悟を定めたらしいお梶は、火のような瞳で、男の顔を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フツと吹き消してしまつた。

恐ろしい沈黙が、其処そこにあつた。

お梶は、身体中の毛髪が悉く逆立つような恐ろしさと、身体中の血潮が悉く湧き立つような情熱とで、男の近寄るのを待っていた。が、男の苦しそうな息遣いが、聞えるばかりで、相手は身動きもしないようであった。お梶も居竦んだまま、身体をわなわなと顫わせているばかりであった。

突如、藤十郎の立ち上る氣勢がした。お梶は、今こそと覚悟を定めていた。が、男はお梶の傍を、影のようにすりぬけると、灯のない闇を、手探りに廊下へ出たかと思うと、母屋の灯影を目的に獣のように、足速く走り去ってしまったのである。

×

闇の中に取残されたお梶は、人間の女性が受けた最も皮肉な残

酷はずかな辱しめを受けて、闇の中に石のように、突立っていた。

悪いたずら戯らとしては、命取りの悪戯であった。侮辱としては、この

世に二つとはあるまじい侮辱であった。が、お梶は、藤十郎からこれ程の悪戯や侮辱を受くる理由いわれを、どうしても考え出せないのに苦しんだ。それと共に、この恐ろしい誘惑の為に、自分の操を捨てようとした——否、殆ど捨ほとんててしまった罪の恐ろしさに、彼女は腸はらわたをずたずたに切られるようであった。

一一

酒宴の席に帰った藤十郎は、人間の面かおとは思えないほどの、凄すさま

じい顔をしていた。が、彼は、勧められるままに大盃を五つ六つばかり飲み乾すと、血走った眼に、切波千寿の方を向きながら、

「千寿どの安堵めきれい。藤十郎、この度の狂言の工夫が悉く成り申したわ」と云いながら、声高に笑って見せた。が、その声は、地獄の亡者の笑い声のようにしわがれた空っぽな、気味の悪い声であつた。

×

弥生朔日やよいついたちから、万太夫座では愈々いよいよ近松門左が書き下しの狂言の蓋ふたが開かれた。藤十郎の茂右衛門と切波千寿のおさんとの密み

夫そかおの狂言は、恐ろしきまで真に迫って、洛らくちゆう中洛外の評判か



まびすしく、正月から打ち続けて勝ち誇っていた山下座の中村七三郎の評判も、月の前の螢ほたるび火のように、見る影もなく消されてしまった。

が、この興行の評判に連れて、京童きょうわらべの口にこうした挿話そうわが伝えられた。それは、『藤十郎殿は、この度の狂言の工夫には、ある茶屋の女房に偽って恋をしかけ、女が靡なびいて灯を吹き消す時、急いで逃のがれたとの事じやが、さすがは三国一の名人の心掛だけある』と云う噂うわさであつた。

『偽にもせよ、藤十郎殿から恋をしかけられた女房も、三国一の果報者じや』と、艶なまめいた京の女達は、こう云い添えた。

こうした噂までが、愈いやが上に、この狂言の人氣を唆そそつた。

来る日も、来る日も、潮うしおのような見物が明け方から万太夫座の周囲に渦を巻いていた。

弥生の半ばであつたろう。或朝、万太夫座の道具方が、楽屋の片隅かたすみの梁はりに、縊くびれて死んだ中年の女を見出したみいだ。それは、紛れもなく宗清むねせいの女房お梶であつた。お梶は、宗清とは屋続きの万太夫座に忍び入つて、其処を最期の死場所と定めたのである。その死因つひに就ても、京童は色々に、口性くちさがない噂を立てた。が誰人たれも藤十郎の偽りの恋の相手が、貞淑の聞え高いお梶だとは思ひも及ばなかつた。

ただ、お梶の死を聴いた藤十郎は、雷に打たれたように色いろを易かえた。が彼は心こころの中で、

『藤十郎の芸の為には、一人や二人の女の命は』と、幾度も力強く繰り返した。が、そう繰り返してみたものの、彼の心に来た目に見えぬ深手は、折にふれ、時にふれ彼を苛ま<sup>さいな</sup>ずにはい<sup>な</sup>かつた。

お梶が、楽屋で縊れた事までが、万太夫座の人氣を培<sup>つちか</sup>つた。

お梶が、死んで以来、藤十郎の茂右衛門の芸は、愈々冴<sup>さ</sup>えて行つた。彼の瞳<sup>ひとみ</sup>は、人妻を奪う罪深い男の苦惱を、ありありと刻んでいた。彼がおさんと暗闇で手を引き合う時、密夫の恐怖と不安と、罪<sup>おそろ</sup>の怖<sup>おそろ</sup>しさとが、身体一杯に溢<sup>あふ</sup>れていた。

其処には、藤十郎が茂右衛門か、茂右衛門が藤十郎か、何の差別もないようであつた。恐らく藤十郎自身、人の女房に云い寄る

恐ろしさを、肝に銘じていた為であろう。

# 青空文庫情報

底本：「藤十郎の恋・恩讐の彼方に」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45）年3月25日初版発行

1990（平成2）年1月15日第34刷

初出：「大阪毎日新聞」

1919（大正8）年4月

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 藤十郎の恋

菊池寛

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>